

(様式 3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	長野県	市町村名	箕輪町	大学名	
派遣日時	令和7年11月30日(日曜日) 14:00~16:10「多文化共生は教育から」(間に休憩5分) 16:30~17:30 質疑応答・懇談会 令和7年12月1日(月曜日) 8:30~9:50 箕輪中学校 日本語教室視察 10:00~11:10 箕輪中部小学校 日本語教室視察 ※本報告書とは別に、派遣当日の次第、研修実施要項・日程表等、日程の詳細(休憩時間も明記)が分かる資料を添付してください。				
実施方法	派遣 / 遠隔 ※いずれかに○をつけてください。				
派遣場所	産業支援センターみのわ 2階 研修室 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪 10286 番地				
アドバイザー氏名	東京外国語大学 多言語多文化共生センター長 准教授 小島祥美アドバイザー				
相談者(受講者)	上伊那郡内を中心に活動されている教育関係者等 ※参加者名簿別紙				
相談内容等	外国につながる児童生徒への学習支援について、課題を共有し相談できる専門家がおらず、教科学習のための日本語学習と日常会話は異なる点やトランスランゲージの視点など、教育関係者間での情報共有や指導体制の方向性が示せておらず、外国につながる児童生徒へ進路指導も含めた長期的視点での指導が行えていない。 また、現在、箕輪町は比較的年齢が高い生徒たちの途中編入が続いており、日本語ゼロ初級で途中入学した生徒への支援についてのノウハウもなく、進路の選択肢が狭められてしまっており、今後の「育成就労」制度を見越し、更に増えるであろう外国につながる児童生徒への支援体制基盤を作るために、有識者からの指導助言を受け、外国につながる児童生徒に携わる教諭や指導者、支援者一同が同じ共通認識のもと、知識の共有と情報の共有を図り、対応力を高めるとともに連携体制を構築していくことが必要であり、課題であるため、教育関係者に向けた外国ルーツの児童生徒に向けた日本語教育の重要性に対する意識啓発と今後の目指す方向性について講義をお願いした。				
派遣者からの指導助言内容	1地域の実態を知ろう 令和6年度外国人の子供の就学状況等調査結果及び長野県市町村別就学状況等調査と公立小中学校における日本語指導が必要な児童生徒の国籍別在籍人数のデータ提供 ・2019年から国による外国籍児童生徒の未就学児状況調査を開始。 ・箕輪町は就学状況等調査結果がゼロ(教育委員会から提出されていない)。 ・箕輪町の日本語指導が必要な児童生徒の調査結果は25名で、他市町村と比較して多いのがわかる。 2「ことばのものさし」とは? ・ことばの力のものさしを支える理論として、母語と日本語どちらも活用して考える深層面を育てることが大事となる「二言語相互依存説」と、支援を得てできることを学習することが学びを起こすという				

「発達の最近接領域」の二つの理論について説明いただいた。

・ことばのちからのものさしは、「聞く・話す」「読む」「書く」別に括的なことばの発達ステージ(母語も合わせて最大限持っている包括的な力)と日本語の習得ステップ(日本語のみで習得している力)をマトリックス図にて現在の力と支援の方向性を可視的に確認できるツール。

・勉強ができるとか、できないだけではなく、子供が持っていることばの力の実態を知ることが「子供達の見取り」となり、個別最適な公平な学びへと繋がっていく。※公平とは平等とは異なり、個人ごとに合わせた学びを展開していくこと。

・多文化多言語の子供の眼鏡でその子本来の力を評価し、その子の強みを活かした目標の位置を定めて、学習指導計画を立てることが大切。

・来日して2年未満の子は発達ステップを伸ばす(縦に伸ばす)子が多く、母語も使いながら日本語での表現方法を学び、自分で出来たという経験による学習意欲の増加事例が紹介された。

・長期滞在者はステージ及びステップを伸ばす(斜めに伸ばす)子が多く、日本語を流暢に話せるがゆえに、正しいステップでの評価がされず、自分ではできないと誤った自己評価になっている子が多く、母語で話せる安全安心な場による自己ルーツ発表による自信をつけさせ、自己肯定感の向上に伴う学習意欲向上の事例が紹介された。

・指導のヒントとして、ステージごとに最も伸びる力から次に伸びる力、最後に伸びる力が示され、ステージごとに段階を踏んで成長していく過程を指導者が把握し、順を追って見守る必要性も示された。

3「ことばの力のものさし」に込めた想い

・発達段階の子供にとって、言葉とはコミュニケーションツールのみではなく、「家族」「他者」とつながり、「知識を得る」、「ルーツやアイデンティ」となり、「思考」のツールともなる。

・母語も含めてことばを学ぶことは、気持ちや思いを伝える上で、生きていく上で、最も重要なことであり、そこが養われることで、生きていく力が生まれる。

4「ことばのものさし」で見取ろう(DLAの改定について)

・日本で生まれ育った子や幼少期に来た子は特に日本語は話せても学習面が不足しており、中学受験時等にそれが露出されるケースが非常に多い。深層面での学習が不足し、考える場がなく因果関係が理解できず日本語で説明するレベルにまだ至れていないため、物事を客観的に俯瞰的に見られる学習が必要となる。(斜めに伸ばす学習、ドリル学習(自己完結学習)では伸びない)

・日本語で説明はできなくても、母語では因果関係も含め説明できる生徒も少なくない。DLAでの見取りも非常に重要となる。

<学校視察>

1箕輪中学校

・学校全体には外国ルーツ児童生徒が14人おり、取り出し児童生徒は4人。

・週10時間が日本語教室担当兼任の先生が担当し、その他の時間は空いた先生が補完。

・教室内では学年が混同した中で、異なる授業を同時に進め、特別な教育課程はなし。

2箕輪中部小学校

・町内の通える外国ルーツの児童生徒は中部小へ集まり、現在26人が通っている。

・日本語教師が専属で配置され、特別な教育課程はなし。

・参観日に向けて「自分のルーツ国」を調べて発表する取組があり、学年やルーツを超えた児童同士の交流が見られた。

(様式 3)

相談後の方針の変化、今後の取組方針等	<ul style="list-style-type: none">・地域児童の日本語教育に携わる関係者が「ことばの力のものさし」とDLAについて実例に触れながら講義を受講したことで、今まで対談や保護者面談の中で行っていた現状把握とレベル判断がツール活用により統一され、外国ルーツ児童生徒に対する指導や支援の方向性を共通認識することができた。・発達途中であるからこそ、日本語のみのステップ段階での評価のみではなく、母語も合わせたステージ判断が非常に重要で、「日本語が話せている＝支援必要なし」ではなく、要支援の可能性のあることを周知できた。・今後は、丁寧なDLA実施と「ことばの力のものさし」導入による外国ルーツ児童生徒の正しい現状把握により、表層面ではなく深層面を育てるため、母語も活用した思考を深める学習も取り入れながら、誰もがステップやステージが上がる公平な指導と評価をしていく重要性について、町教育委員会内で検討していきたい。・現状取り入れられていない特別な教育課程についても、必要性について検討してまいりたい。
--------------------	---

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。